

分裂するケストナー像

——エーリヒ・ケストナーのゲオルク・ビューヒナー賞記念講演——¹

竹内拓史

1. はじめに——ゲオルク・ビューヒナー賞とケストナーの記念講演

1922年にヘッセン州により創設されたゲオルク・ビューヒナー賞は、当初ヘッセンにゆかりのある新人作家を対象にしたものであったが、1933年から1944年までの空白期間を経て、1951年に主催をヘッセン州からドイツ言語・文化アカデミーに変え、賞の対象を「現代ドイツの文化生活の形成に重要な貢献をしたドイツ語で書く作家」²とした。その後その錚々たる受賞者の顔ぶれから、この賞は戦前のゲーテ賞に変わって実質的にドイツ最高の文学賞と認識されるようになる。ナチス政権時代に政治利用されなかったことも、戦後にこの賞が権威あるものになりえた大きな要因であろう。この賞の受賞者は、他の文学賞同様、受賞記念講演をおこなう義務および権利を与えられるが³、そこではしばしば興味深いビューヒナー論や現代ドイツに対する鋭い批判が——ときにはその両方が同時に——展開される。それらの講演からは戦後のドイツ語圏文学者が、ビューヒナーの作品と現代ドイツ社会をどのように関連づけて捉えているのかが看取されるが、それはビューヒナーの作品が現代ドイツにおいてどのように受容されるのかを示すとともに、作品が生み出されて200年近くが経つ今もおそれらの作品がアクチュアリティを持

っているひとつの証左ともなっている⁴。

当初はいわば「紋切り型の挨拶と、せいぜいのところ私的な文学観の吐露」⁵にすぎなかった受賞記念講演がこのようなスタイルになったひとつのきっかけは、1957年のエーリヒ・ケストナーの講演だった。西ドイツは当時、戦後を脱しつつある過渡期にあった。1955年に発効したパリ協定で主権を回復した西ドイツは⁶、ドイツ連邦軍の編成による再軍備をおこない、北大西洋条約機構（NATO）にも加盟する。1956年には一般兵役義務法が可決され、18歳以上の男性には12ヶ月の兵役が課せられる⁷。再軍備に反対するケストナーは⁸、受賞記念講演で本格的なビューヒナー文学論を展開するとともに、ドイツの戦後政策に批判を加えたのである。つまり、前述したビューヒナー賞記念講演の性格は、その後の受賞者がケストナーのものを踏襲した結果であり、ケストナーの講演はその後の受賞記念講演の基調を定める極めて重要なものだったと考えられる。そしてこのことは、「抵抗作家」⁹ケストナーの面目躍如たるものと従来考えられてきた。しかしスヴェン・ハヌシエクのケストナー伝¹⁰をはじめ、これまで考えられてきたようないわゆる「ナチスへの抵抗」¹¹をした作家とは異なる一面がケストナーにはあったという主張が近年見られる。これらの主張は、「抵抗作家」ケストナーがおこなったとみなされてきたビューヒナー賞記念講演の再考も当然ながら促すことになる。本稿では、1957年のケストナーのビューヒナー賞記念講演を、単なる「ビューヒナー論」および「戦後ドイツ批判」という観点とは異なる視点から考察することで、「抵抗作家」ケストナーの戦後の苦悩を探ってみたい。

2. 受賞に関する三つの疑問

まず、ケストナーの記念講演の中身を概観してみよう。上述のようにケストナーは講演の中でビューヒナー論を展開するが、その前にまずこの賞を受賞したという「喜びの空を覆う雲」¹²について言及する。雲とは「疑問」のことであり、まずケストナーはそもそも自分にはこの受賞の資格があるのか

を三点から検証する。これは自他共に風刺作家であることを認めるケストナーが、その矛先を受賞者としての自分自身に向けているようにも見える。彼の挙げる三点の疑問は以下の通りである。

一点目は、「この賞が天才的な作家を記念して授与される」¹³ことから発せられる疑問であり、そもそもこの賞に冠されるビューヒナーという名前に値する作家など現代において存在しないのではないかという疑問である。

二点目は、「彼(風刺作家)は良心の呵責を感じずに榮譽に浴しているのか。彼の皮肉は今彼を讃えているまさにこの公的機関だけには向けられることはないのか」¹⁴という疑問である。つまり、風刺作家を自認する自分が、いわば権威と切っても切れない関係にある「賞」などというものをもらうことが許されるのかという疑問である。

三点目は「賞を取る人間はいつも年寄りばかり」¹⁵ではないかという疑問である。ビューヒナー賞受賞当時のケストナーは58歳であった。

ケストナーはこれらの疑問を提示した後自分で回答する。ならばこれは、穿った見方をすれば、自分に風刺の矛先を向けているというだけでなく、自身の受賞に対してありうる批判にケストナーが予防線を張っているということもできる。

これら三点の疑問に対するケストナーの回答は以下の通りである。

ビューヒナーという名前に値する作家など存在するのかという疑問に対しては、ビューヒナー自身もゲーテを知っていたうえにシェイクスピアを知っていたのだと述べ、芸術活動とは価値や偉大さのみを基準におこなわれるのではなく、たった一度きりのかけがえのない命をかけておこなわれることにこそその尊さがあるのだと主張する。また、ビューヒナーは現在ではドイツ文学史上で確固たる評価を受け、天才的な作家と認識されているため、安易にその名前に値する現代の作家を挙げることなど誰一人できるはずがなく、気にする必要はないとも主張する¹⁶。回答の後半はいわばケストナー流の謙遜とも受け取れるが、注目すべき点はケストナーが「命をかけて芸術活動をおこなう」¹⁷と述べる点にある。なぜならケストナーはナチス政権時代の「国

内亡命作家」、「ナチスに抵抗した作家」、「反戦家」などとして知られており、芸術に命がかかっているとケストナーが言うとき、それはナチス政権時代に命を賭してナチスに抵抗した多くの作家のことを否応なく想起させるからである。ケストナーも当然このことを意識していることは、後の二つの疑問への回答からも理解される。

二点目の風刺作家が権威ある賞をもらうことへの疑問に対しては、ビューヒナー賞は他ならぬビューヒナーの名前——革命家であり体制への命を賭した抵抗者で、『ヴォイツェク』に代表されるように弱者の側に立った作家であるとともに、『レオンスとレーナ』のような風刺作品を書いている作家の名前——を冠しているこの賞であるならば、自分が授与されるのも問題はないとケストナーは主張する¹⁸。この回答からは、命を賭した体制への抵抗者としてのビューヒナーと、ナチス時代に命を落とした多くの反体制活動家や作家をケストナーが同列に置いていることのみならず、その中には当然自分も含まれることをケストナーが前提としていることが理解される。そうでなければ、このことはケストナーがこの賞を受領してよい理由にはなりえない。

だが革命家の名前がついていれば問題が無いという議論は少々乱暴である。そのことは、ビューヒナーの名前がまさにナチス時代に、またその後の東ドイツでも政治的に利用されたことを思い起こせば理解できる¹⁹。公的機関によるビューヒナー作品の利用の危険性に触れることのないこのような安直な議論からは、むしろケストナー自身がビューヒナーの名前を賞を貰うための言い訳に利用している感さえ拭えない。

続いて三点目の疑問に対するケストナー自身の答えを見てみよう。おそらく彼がもっとも熱を込めて語っているのは、この最後の問いに対する答えである。「賞を取る人間はいつも年寄りばかり」ではないかという疑問に対して、それまでの二つの疑問に対する答えとは異なり、ナチスに直接言及してケストナーは答える。彼は、当時「望ましくなく政治的に信用ならぬ」とされた自分たちの栄誉ある賞は「追放と禁止」であり、「国籍剥奪」さらには「刑務所や強制収容所だった」²⁰と語気を強め、さらにあの焚書の時代のことがあま

りに過小評価されている、早くも忘れ去られていると再軍備を進めるドイツの戦後路線について警鐘を鳴らす。ケストナーがナチス政権時代に焚書の対象となりながらも亡命せずにドイツ国内に留まったいわば「国内亡命者」であったことは、周知の事実である²¹。その彼がナチス時代のことを持ち出して加えるドイツ批判は重みがあり、またそれゆえにこの答えに正当性を与えているとも言える。

だが一方でこれらのケストナーの自問自答には、なにか違和感がある。それは、ケストナー自身が投げかけた二番目の問いと同種のものであろう。つまり皮肉家や風刺作家を自認するケストナーが、自分が賞を授与されることの正当性の主張から講演を始めたことに対する違和感である。しかもその二番目の問いに対する答えは、上述したとおり、性急で乱暴な議論であり強引な自己弁護にも見えるのだ。

だがその点についてさらに考察するには、まず彼の受賞記念講演の続きを見てみる必要がある。

3. ケストナーのビューヒナー論

自身の受賞に対する正当性を主張し終えたケストナーは、ビューヒナー論へと話題を転換する。ここでも彼は論点を三点に分けて話を進める。

1. ビューヒナーをゲーテと同等の存在とみなし、その天才性と独自性を高く評価する。
2. ビューヒナー作品は歴史的題材を扱っているものとしては極めて希なことだが、開かれた物語として成功をおさめていると主張し、同時に歴史的物語が果たす文学的役割について言及する。
3. ビューヒナー文学を「悲劇的喜劇」ならびに「悲劇的グロテスクな文学」と名づけ、その作品の先見性を讃える。

それぞれを詳しく見てみよう。一点目でケストナーは、ビューヒナーを誰の亜流でもないゲータに比肩する作家であり、その意味でゲータ後のどの作家とも異なると語る。一方で逆に傾いた作家という点でビューヒナーは Sturm und Drang の作家と親近性を持つが、彼は Sturm und Drang 以後の悲劇的歴史を知っていたが故に彼らよりずっと懐疑的で絶望的であったという。これはビューヒナーがいわゆる「宿命論の手紙」に絶望的歴史認識を書き記していることを指している。以下はその手紙の一部である。

僕は革命の歴史を勉強した。恐ろしい歴史の宿命に打ちのめされたように感じた。人間の本性の内に、恐ろしいほどの同一性が、人間の状況には逃れることのできない力が見えてきた。それは皆に与えられながら、誰にも与えられていない。一人一人の人間は波の上の泡にすぎず、偉業もほんの偶然のものであるし、天才の統治は一種の人形劇で、鉄の法則に対する滑稽な悪あがきにすぎない。この法則は認識するのがせいぜいで、それを支配することは不可能だ。歴史上の華々しいがどうしてもない人たちにも、隅っこに突っ立っている人たちにも僕はもはや頭を下げる気はしない。僕は自分の目を血に慣れさせた。しかし僕はギロチンの刃じゃない。必然とは罪深い言葉だ。人間はこの言葉の洗礼を受けてきた。「躓きは必ず来るべし。しかし躓きをもたらず者は禍なり。」〔引用者注：聖書マタイ伝 18 章 7 節〕——この言葉は身震いするほど恐ろしい。僕らの内にあつて、偽り、殺し、盗みを働くものはなんなのだろう。僕はもうこの考えについていけない。」²²

（1834 年の 1 月の中頃から終わりにかけて²³、婚約者に宛てて）

これらのビューヒナーの認識は一時的なものではなかった。手紙の前半で、すべての人間は恐ろしいほどの同一性を持ち、人間は状況から逃れることが

できないと述べられた決定論的思想は、約一ヵ月後の家族宛ての手紙で形を変えて再び表れる。

僕は誰のことも軽蔑はしません。その人の理解力とか、教養とかいう理由で軽蔑することは最もありえないことです。なぜなら、ばかになるまい、罪を犯すまいと考えても自分の力ではどうにもならないのです。私たちは誰でも同じ環境であったら、皆同じような人間になるだろうし、環境は人間の力の及ばないところにあるのですから²⁴。

(1834年2月、家族に宛てて)

ここでは、人間の生のありようは意志の力では変えようがないという宿命論に、さらに環境こそが生を決定するという思想が付け加えられている。またこの手紙のおよそ一年後には、「宿命論の手紙」に出てきたテーゼがほぼそのまま、彼の最初の戯曲『ダントンの死』に主人公の台詞として出てくる。さらに、亡命後執筆した彼の作品にもこの種の宿命論的思想は見られる。しばしばビューヒナー研究の最大の謎ともされるが、このような絶望的歴史認識を持っていたにもかかわらず、しかも「宿命論の手紙」の執筆直後に、ビューヒナーは革命運動を実行に移し²⁵、あえなく失敗する²⁶。

ケストナーは受賞記念講演の続きでこのようなビューヒナーを評し、「希望無き闘士」であり、「宝くじを買わなければ当たりにはない」という信念のもと「籤に実際に参加した若き反逆者であった」と述べる²⁷。ケストナーが描くほとんど希望の無いまま体制に反抗するビューヒナーの姿は、すでに講演の前半でナチスに反抗した知識人について言及されているため、当然ケストナーら「国内亡命者」の姿と重複する。ここで革命家としてのビューヒナー像を再び提示することで、前述の三点の疑問点に対する回答とこのビューヒナー論は接続するのだ。

さらにこれに続いてビューヒナー論の二点目としてケストナーは、ビューヒナー作品が歴史的題材を素材にしていることに触れ、歴史は終わることな

く続いているので、歴史を素材にした作品はすべて必然的に途中で物語として終わらざるをえず、結末のない断片となるしかないと述べる²⁸。これは換言すれば、歴史を素材とした文学作品は、物語の結末としてある区切りを付けざるをえないが、それを読む人間はその後の歴史を当然知っているので、どうしても歴史の断片にしかかなりえないという短所を持っているということである。しかしケストナーが言うには、ビューヒナー劇はそのような難点を長所に変えている希有な例である。その理由は、前述の「ビューヒナーの絶望」とも関連することだが、ビューヒナーが「英雄の存在など信じていなかったから」²⁹であるという。そしてまさにそれがためにこそビューヒナーの作品の結末は短絡さを免れ、開かれたものとなり成功をおさめているという³⁰。「英雄の存在など信じていなかった」からこそ成功を収めたビューヒナーの姿は、ヒトラーを信奉したドイツ人の姿を批判的に浮かび上がらせるものであり、ここでも先ほどの三点の疑問とビューヒナー論は連関する。

ビューヒナー劇への三点目の言及では、彼は心理描写の秀逸さを述べるとともに、それにもまして「自然科学者」ビューヒナーの手による³¹「悲劇的グロテスク」³²としての劇を高く評価する。ケストナーによると、ビューヒナーの劇では状況が極端にデフォルメされ、しかもその状況は「限界の彼方」³³にあり、この誇張や登場人物の戯画化により、現実に対して極めて有効な批判が可能になる。さらにビューヒナー劇では現実を描写することなく現実が呼び起こされ、告発の声があがっていないにもかかわらず告発の声が強く響くと主張する。

ケストナーによって言及されたこれらのビューヒナー文学の特徴から浮かびあがるビューヒナー像は、絶望的な現実を前にしてもなお体制に反抗すると同時に、過酷な現実とそこで虐げられる人々の叫びを、歴史素材を媒解に独自の手法で極めて効果的に表現しきった、アンガジュする文学者である。だが歴史的素材を使用した文学の使命を述べ、「喜劇的悲劇」という言葉を駆使してビューヒナー文学を特徴付けようという点には目新しさがあるものの、これらの解釈が、ケストナー自身も認めているように³⁴、とりわけ新しい説

でないことは確かである。だからこそ、自らの受賞の正当性を主張する前置きに加えビューヒナー論においても、弱者を救うため絶望の状況に立ち向かう革命の英雄としてのビューヒナー像を強調することには、ケストナーの意図を感じざるをえない。

そのことを考察するには、さらにこの講演の続きを見てみるのが有効であろう。というのも彼はこのビューヒナー論の最後（つまりこの講演の最後）で、自身の戯曲『独裁者の学校』を引き合いに出し、自らを「ビューヒナーの弟子」³⁵と呼ぶからである。この講演がなされたのは既に述べたように1957年であるが、これは『独裁者の学校』を書いた翌年である。ファシズムとファシズムに傾く民衆の危険性を描いた『独裁者の学校』は、ケストナー自身が言うには、1936年から構想を練っていた力作だったが³⁶、観客には不評だった³⁷。それどころか失敗であったと断じる批評家もいたという³⁸。ケストナーが抵抗作家としてのビューヒナー像を描き、自らを彼の弟子とまで言ってそのビューヒナーと自分を重ねて見せようというとき、彼の念頭にこの作品の芳しくない評判があったと考えるのはあながち的外れではあるまい。

終戦直後のケストナーの発言は、ドイツ人たちのナチス支持から反ナチスへの変わり身の早さを皮肉たつぷりに批判することはあったものの³⁹、その多くは焦土を前に絶望するドイツ国民を励ますものや、戦勝国のドイツ占領への批判などであった。しかし1952年にドイツ政府が再軍備を決定した頃からその論調は変わり始め、軍備と経済発展にばかり目を奪われ、ナチス時代のことを忘れたかのように振る舞うドイツ社会に対する批判が展開される⁴⁰。しかしその批判が功を奏すことはなく、1955年に西ドイツは再軍備を実行に移す。その背景には、当時の冷戦構造における西側諸国の思惑と、主権回復という西ドイツの思惑があったが、彼の批判に耳を貸さず再軍備や徴兵制を支持する国民と、『独裁者の学校』に目もくれない国民が、彼の中ではほとんど同列に扱われていたのではないだろうか。だからこそこの講演でケストナーはナチス時代のことを直接的・間接的に想起させ、反体制派の革命家であったビューヒナーと自分を重ねて印象づけるとともに、ファシズムの恐怖を

描く自分の作品を引き合いに出す必要があったのだ。ならば、この講演の前置きで述べた三つの疑問への回答とその後のビューヒナー論は、賞を受けると自分や評判の悪い自作の弁護というより、やはり当時のドイツ社会への彼なりの真摯な批判と捉えられる。

4. 戦後のドイツ知識人の苦悩とケストナー

しかし、そう断じる前に二つのケストナー評を考察してみたい。ひとつは比較的古いもので、もうひとつは比較的新しいものである。古いものはナチス政権成立前夜の1932年にある新聞にヴァルター・ベンヤミンによって書かれたものである。

ケストナーの詩は今日すでに三冊のすばらしい装丁の本となっている。

（中略）これらの詩の人気はある階層の台頭と関係がある。その階層とは、経済的な権力や地位を臆面もなく独占し、おのれの経済のありさまを露わにして隠し立てしないことを、他のどの階層とも異なり、少々鼻にかけていた階層である。しかし、成功にしか目を向けず、成功の他は何も認めてこなかったこの階層こそが、現在もっとも強大な地位を獲得しているというわけでは決してない。（中略）彼らは、大資本家が一族のため何十年も先のことを考え、準備をしておくのとは異なり、自分自身のためにしか備えておらず、しかもそれが一代以上にわたる備えであることはほとんどない。（中略）この詩人がなにか言うべきことがあるとすれば、それは本来ただこの階層に対してのみである。さらにこの階層の人たちにのみ、彼は媚を売るので。⁴¹

このようにケストナーの詩はドイツ社会の中間層のために書かれたものであると述べた後ベンヤミンはさらに、彼の詩は決して「政治的」でもなければ、社会を「変革」するものでもないと厳しく批判する⁴²。この批評はまだナチ

スが政権を掌握する前のことであるが、この後まさにこれら社会の中間層からナチスが支持を集め政権を掌握し、ナチスともどもドイツが暴走したことを勘案すると、この批判は新聞に載った当時よりむしろ戦後のケストナーにとってこそ辛辣で手痛いものだったに違いない。だがこのようなベンヤミンのケストナー批判は、ナチスに抵抗した作家というケストナー像のため、戦後はあまり取りあげられることはなかった。

この批判を再び想起させる新しいケストナー像を提示したのが、ハヌシエクである。彼はケストナーの伝記を書くにあたって、徹底した一次文献の検証をおこなった。そうして彼が明らかにしたことは、ナチスの政権奪取後ケストナーは具体的な反ナチ斯的行動を実質的にはなにひとつ取っておらず、ナチスに抵抗した作家というのは虚像でしかないというものであった。ケストナー自身「罪のない人間を殺した者が昇進となった。人間的な考えやキリスト教徒的な考えを口にした者は、首をはねられたり絞首刑に処せられた」⁴³と記し、実際にユダヤ人が迫害されている現場に通りにかかっても何もしなかったことも告白している⁴⁴。つまり、「彼ら（「白バラ」のメンバーをはじめとするナチスに抵抗し極刑に処せられた人々）以外のすべての国民と同様にケストナーも、おこなっていたのは抵抗でなく妥協だった」のであり、言うなればせいぜいケストナーの妥協は積極的な妥協ではなくささやかな妥協であったのが他の人と違う点だったという⁴⁵。またハヌシエクは、ケストナーが戦中に読みにくい速記文字でわざわざ書いたメモ類まで調べ、そこにすら同時代のドイツを批判するものはひとつも見あたらなかったという⁴⁶。それどころかケストナーが、ゲッベルスが自分の映画を観た後に満足の意を表したと日記に書き、母親にあてた手紙では時局が切迫してなければゲッベルスは彼に賞を出したであろうとまで書いていたことを明らかにする⁴⁷。これらのことは、ケストナーがナチスに抵抗したことをただちに否定するものではないし、ましてナチスに賛同していたことを示すものでは当然ない。また「積極的な妥協」と「ささやかな妥協」の違いは、当時決して小さな違いではなかったことも十分考慮するべきであろう。ハヌシエクの調査から分かるのは、

少なくともケストナーが妥協以上のことをしたと判断できるものもないということであるが、その価値判断は極めてデリケートな問題である。

だがまさにこのベンヤミンによるケストナー批判やハヌシェクの伝記から浮かびあがるケストナー像と、ビューヒナー記念講演でケストナー自身が描くケストナー像の隔たりこそが、この受賞記念講演を読むときに感じる違和感の理由ではないだろうか。講演当時や戦後にケストナーがこのベンヤミンの批判を意識していたかどうかは定かではない。だが例えば戦時中にケストナーが日記にベンヤミンの名前を書き付けていることなどから⁴⁸、少なくともケストナーがベンヤミンを意識していたことは確かであるし、当時他には見あたらないほど厳しくケストナーを批判したこの新聞記事が、戦後も彼の意識にあったと考えることは不自然なことではない。またナチスに抵抗した作家としてのケストナー像を——それが事実かどうかは別として——ケストナー自身が意識していたかどうかも確かなことは言えないが、ビューヒナー賞記念講演に見られる、性急な論旨展開により自分をビューヒナーの後継者に定めるケストナーの論調を考慮すれば、多分にそのことを意識していたとみなすのが妥当であろう。

またケストナーは、戦後も東ドイツにとどまるフリッツ・ラダッツに対して「僕の生き方は間違っていた」と言い、「あなたも罪を犯すつもりじゃないでしょうね」と尋ねたという⁴⁹。また他のところでは「今の僕は国にとどまることで独裁政治の打倒に決定的な貢献ができるなどとはもう考えていません」⁵⁰とも言っている。これらの言葉は、ビューヒナー賞記念講演の口ぶりとは反対に、ケストナーがナチス時代の自分の行為に正当性を見いだせなかったことを示している。ならばこの記念講演で着目すべきは、単なるケストナーによる「ビューヒナー論」や「戦後批判」だけではないだろう。輝かしいはずの受賞記念講演を苦しい言い訳から始めなければいけないケストナーの姿や、国内にとどまり続けてナチス批判を続けた「抵抗作家」という自身のイメージを、革命家というビューヒナーの姿に自身を重ねることで護持しようとするケストナーの姿に注目し、戦時中にナチスを直接的に批判すること

ができなかったドイツ知識人の苦悩をも見てとるべきなのである。ナチスの政権掌握前から崩壊まで一貫してヒトラーを批判し続けたトーマス・マンと、ドイツに留まった知識人との戦後の確執の一因はまさにその点にあったが⁵¹、ケストナーは国内亡命作家としてその論争に加わるものの、マンを激しく攻撃するようなことはなかった⁵²。ケストナーが一般的には戦前からナチスを批判し続けた「抵抗作家」とみなされていたため、ドイツに留まった他の作家とは一線を画す存在だったこともその理由のひとつと考えられる。その後は亡命した作家について長い間ケストナーは沈黙を保ってきた。彼が亡命した人々について公の場で言及するのは1970年、71歳になってからのことである。ある書籍展示会の開会の挨拶時に、「私はあの人たち（亡命者）の生き方や文学に対する勇気に感嘆の念を覚えずにはいられません。また嫉妬を覚えることなくこの二つのことに感嘆し、自分は逃亡の課程で戦いを続け生き続ける能力が欠けていたことを素直に告白します」⁵³と述べた。だが、同時に自分が第三帝国時代に二度も逮捕されたというおなじみの話を繰り返すことも忘れはしなかった⁵⁴。これらの事実とビューヒナー賞記念講演の再考からは、戦後ドイツの知識人が苦しめられた問題——なぜ当時ナチスを批判しなかったのか——から、ケストナーもまた無縁ではなかった、どこか極めて意識的にならざるをえなかったことがうかがわれる。

5. おわりに——抵抗文学としてのビューヒナー文学

以上のようにケストナーのビューヒナー賞記念講演は、ドイツ批判というこれまでの観点に加え、戦後のドイツ知識人が抱える苦悩という観点からも考察される必要がある。これまでは後者の観点が欠けていたため、このケストナーの受賞記念講演は広く好意的に受け入れられてきた。それは前述のように、このケストナーの講演同様ビューヒナーをとりわけ批判精神の象徴ととらえ、抵抗作家としてのビューヒナー像を立脚点にドイツ社会を批判的に考察するという受賞記念講演のスタイルをその後の受賞者が踏襲したことか

らも理解される。だが見方を変えれば、それはその後の講演がこのようなスタイルにむしろ縛られているとも捉えられる。というのも、ビューヒナー文学のひとつの魅力は、ケストナーも述べているように、未完であり開かれた文学であることであり⁵⁵、それゆえの解釈の多様性と多面性である。ビューヒナー文学が抵抗文学の側面を持っていることに異論を挟む余地はないが、それはビューヒナー文学の一側面であると捉えるべきであり、それにのみ縛られてしまうことは、逆にビューヒナー文学を損なってしまう可能性もある。ビューヒナー文学を抵抗文学とみなし、そこに自己投影することは、極めて魅力的で強い誘惑を持っている。もちろんケストナーがその誘惑に屈したと安易に断じることはできないし、ましてや彼の講演の「スタイル」を批判するのは的外れであろう。しかしビューヒナー論がそこにのみ立脚点を持つ危険性は認識するべきである。

それが単なる杞憂ではないひとつの例がディートマー・ゴルトシュニックの見解である。彼はビューヒナーの抵抗文学としての側面を重要視するあまり、作品の政治的側面のみをとりあげ、さらにはビューヒナーを脱政治化したり、歴史的文脈から切り離したりする解釈者は、民族社会主義者であると激しく糾弾する⁵⁶。ゴルトシュニックのように抵抗文学としてのビューヒナー文学を用いて、いわば新たな排他主義に傾倒する例が見られることは言及しておかねばならない。

このような極端な例はビューヒナー賞記念講演には見られないが、抵抗文学としてのビューヒナー文学をひとつの立脚点とする講演が多いことは確かである。もちろんビューヒナー賞記念講演では、ドイツ社会に対するひとつの問題提起の契機として抵抗文学としてのビューヒナー文学を強調するにすぎないと考えられる。だがその始まりがナチスに抵抗した作家であるとともにナチスに妥協した作家であり、今日その人物像が分裂しつつあるケストナーであることを勘案すれば、他のビューヒナー賞記念講演を考察する際にも、単なる社会批判のために抵抗文学としてのビューヒナー文学を引き合いに出していると安易に断じることなく、その背景にそれ以外の様々な理由や事情

——例えばケストナーの場合には戦後のドイツ知識人、とりわけナチス時代に国内にとどまった知識人の苦悩や自己矛盾——がある可能性にも留意するべきであろう。

-
- ¹ 本稿は、平成23年度廣池学事振興基金「重点研究助成」を受けて行った研究成果の一部である。
- ² Büchner-Preis-Reden 1951-1971. Hrsg. von der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung, Stuttgart, Philipp Reclam jun 1972, S. 8.
- ³ Kästner, Erich: Rede zur Verleihung des Georg Büchner-Preises 1957. In: Büchner-Preis-Reden 1951-1971. Hrsg. von der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung, Stuttgart, Philipp Reclam jun 1972, S. 46.
- ⁴ 戦後の受賞記念講演の数はすでに60本ほどになるが、1951年のゴットフリート・ベンの講演から1994年のアドルフ・ムシュクのものまではレクラム文庫で読むことが可能である。またドイツ言語・文化アカデミーのホームページでも1993年以降の講演を読むことができる (http://www.deutscheakademie.de/akademie_archiv3_buechner.html 参照2012-5-5)。日本語では1951年のゴットフリート・ベンの講演から1999年のアルノルト・シュタートダーまでの講演が単行本(ビューヒナーレーデ研究会他訳『照らし出された戦後ドイツ—ゲオルク・ビューヒナー賞記念講演集(1951-1999)』人文書院, 2001年)として出版されており, それ以降の講演は現在のところ2008年のヨーゼフヴィンクラーの講演までが, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会発行の機関誌『子午線』に翻訳が掲載されている。
- ⁵ ビューヒナーレーデ研究会他訳『照らし出された戦後ドイツ—ゲオルク・ビューヒナー賞記念講演集(1951-1999)』2頁。
- ⁶ ドイツの主権の完全な回復は, 1990年に東西ドイツ政府と米英仏ソ連各国との間に「ドイツ最終規定条約(Vertrag über die abschließende Regelung in bezug auf Deutschland)」が結ばれ, 東西ドイツ統一後の1991年3月に米英仏ソ四ヶ国の軍隊がドイツから撤退したときであると考えられる。
- ⁷ 本稿における戦後の西ドイツの再軍備や兵役については, 岩間陽子『ドイツ再軍備』(中央公論社, 1993年)から多くを参照した。
- ⁸ Kordon, Klaus: Die Zeit ist kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästner. Weinheim 1994, S. 271.

-
- ⁹ 日本でケストナーがナチスに抵抗した作家と認識されている理由のひとつは、高橋健二によるケストナーの紹介があるだろう(参照:高橋健二『ケストナーの生涯 ドレーズデンの抵抗作家』駸々堂出版, 1981年。高橋健二『作家の生き方 シュトルム カロッサ ケストナーの場合』読売新聞社, 1972年)
- ¹⁰ Hanuschek, Sven: *Keiner blickt dir hinter das Gesicht. Das Leben Erich Kästners.* München, Wien 1999.
- ¹¹ 高橋健二『作家の生き方 シュトルム カロッサ ケストナーの場合』206頁。
- ¹² Kästner, Erich: a. a. O., S. 43.
- ¹³ Ebd.
- ¹⁴ Kästner, Erich: a. a. O., S. 44. 括弧内は筆者による。
- ¹⁵ Ebd.
- ¹⁶ Kästner, Erich: a. a. O., S. 43 f.
- ¹⁷ Kästner, Erich: a. a. O., S. 44.
- ¹⁸ Ebd.
- ¹⁹ 例えばナチスによるビューヒナー像の歪曲については、谷口廣治『肉体と理念のはざままで』人文書院, 1997年, 289頁以降を参照。
- ²⁰ Kästner, Erich: a. a. O., S. 45.
- ²¹ ケストナーが自分の本が焼かれる現場を見に行ったことはよく知られていることである。(参考: Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 215 f.)
- ²² Büchner, Georg: *Sämtliche Werke.* Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. 2 Bde. Frankfurt am Main, Deutscher Klassiker Verlag 1992 und 1999(=BDK), Bd. 2, S. 377 f.
- ²³ この手紙がかかれた日付に関しては、従来様々な議論がなされてきた。主に1833年の冬から1834年の3月の間で推論されることが多い。最近では、ハウシルトのように、当時の気候に関する報告を考慮して、1834年の1月の中頃から終りにかけて書かれたのではないかという見解も有力である。(参照: BDK, Bd. 1, S. 1098 ff.)ハウシルト自身は1月10日から20日の間と推定している。(参照: Hauschild, Jan-Christoph: *Georg Büchner. Biographie.* Stuttgart, Weimar 1993, S. 268 ff.)ここではそれらを考慮しているBDKに基づき日付をつけた。
- ²⁴ BDK, Bd. 2, S. 378.
- ²⁵ 例えばトーマス・ミヒャエル・マイヤーは、「宿命論の手紙」で吐露されているのは、せいぜいブルジョワ革命の限界であり、機械的宿命論は認められないと主張する

(Mayer, Thomas. Michael. a. a. O., S. 87.)。さらにこの「宿命論の手紙」は恋人であるミンナに手紙を出せないことについての言い訳の手紙であると考え。革命運動に没頭するあまり恋人に手紙を出す余裕がなかったビューヒナーが、精神的に追い詰められた自分を演じることでミンナの非難をかわそうとしただけであり、この手紙はビューヒナーの深刻な心理状態を表すものでは決してないという。以上のような理由から市民革命を目指す彼が革命運動に参加しても矛盾は無いし、ビューヒナーは現実を客観的に把握しながら運動の可能性と限界を見極めたというのが彼の主張である (Mayer, Thomas. Michael. Büchner und Weidig –Frühkommunismus und revolutionäre Demokratie. In: Georg Büchner I/II. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold, Edition text+kritik, München 1979, S. 95-98.)。しかしビューヒナーには幼い頃から英雄主義的、理想主義的などころが多分にあっただうえに、フランス留学中に唯物論的思想を撰取している。また「宿命論の手紙」の前後に書かれたいくつかの手紙も、彼の精神状態がこの時期落ち込んでいたことを示しており、ビューヒナーはフランス革命がブルジョア革命に終わってしまった現実に加え、そこから新たに得た宿命論的認識に大きな精神的ショックを受けていると推察される。そのようなビューヒナーに、「宿命論の手紙」に見られるような英雄や天才をも含む人間そのものの無力さ、同一性の認識が、大きな衝撃を与えたであろうことは想像に難くない。さらにこの「宿命論の手紙」をビューヒナーが書いたのは、彼自身も革命運動の実践へと進もうという時期であった。そのような時期にいた彼には、フランス革命の残虐、残酷な現実が大きな衝撃を与えたと考えるのが妥当であろう。

²⁶ Mayer, Thomas Michael: Georg Büchner. Eine kurze Chronik zu Leben und Werk. In: Georg Büchner I/II. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold, Edition text+kritik, München 1979, S. 370.

²⁷ Kästner, Erich: a. a. O., S. 49 f.

²⁸ Kästner, Erich: a. a. O., S. 52 f.

²⁹ Kästner, Erich: a. a. O., S. 53.

³⁰ 「開かれた劇」については以下を参照: Klotz, Volker: Geschlossene und offene Form im Drama, München 1960.

³¹ ビューヒナーは解剖学を専門にする研究者だった。自然科学者としてのビューヒナーについては拙著『宿命の文学, 宿命としての自然 ——ゲオルク・ビューヒナーの自然科学研究と文学——』(三恵社, 2010年)を参照。

³² Kästner, Erich: a. a. O., S. 55.

- ³³ Ebd.
- ³⁴ Kästner, Erich: a. a. O., S. 50.
- ³⁵ Kästner, Erich: a. a. O., S. 56.
- ³⁶ Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 390.
- ³⁷ Kordon, Klaus: a. a. O., S. 280.
- ³⁸ 高橋健二『ケストナーの生涯 ドレーズデンの抵抗作家』204 頁。
- ³⁹ Kästner, Erich: Werke in neun Bänden. Hrsg. Franz Görtz. München, Wien 1989, 9 Bde, Bd. 6, S. 390 f, 425 f.
- ⁴⁰ Kordon, Klaus: a. a. O., S. 277 f.
- ⁴¹ Benjamin, Walter: Gesammelte Schriften, Bd. 3. Hrsg. Von Tiedemann-Bartels, Hella, Frankfurt am Main, 1972, S. 279.
- ⁴² Benjamin, Walter: a. a. O., Bd. 3, S. 280 ff.
- ⁴³ Kästner, Erich: a. a. O., Bd. 6, S. 514.
- ⁴⁴ Kästner, Erich: a. a. O., Bd. 6, S. 512 f.
- ⁴⁵ スヴェン・ハヌシエク著, 藤川芳朗訳『エーリヒ・ケストナー 謎を秘めた啓蒙家の生涯』白水社, 2010 年, 521 頁。括弧内は筆者による。
- ⁴⁶ 同上
- ⁴⁷ Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 297.
- ⁴⁸ Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 274.
- ⁴⁹ Raddatz, Fritz J: Eine Replik.... In: Die Zeit, 9. 11. 1979, Nr. 46. In: Die Zeit Online. <http://www.zeit.de/1979/46/eine-replik> (abgerufen am 05. Mai 2010)
- ⁵⁰ Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 317.
- ⁵¹ 参照: 山口知三『廃墟をさまよう人びと 戦後ドイツの知的原風景』人文書院, 1996 年, 14 頁以降。
- ⁵² Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 330 ff.
- ⁵³ Hanuschek, Sven: a. a. O., S. 424. 括弧内は筆者による。
- ⁵⁴ Ebd.
- ⁵⁵ Kästner, Erich: Rede zur Verleihung des Georg Büchner-Preises, S.53.
- ⁵⁶ Goltschnigg, Dietmar. Einleitung. In: Büchner im „Dritten Reich“. Mystifikation – Gleichschaltung – Exil. Bielefeld 1990, S. 40 f.